

# 創立百周年記念誌

鳥取県立倉吉東高等学校

# 創立百周年記念誌



鳥取県立倉吉東高等学校

鳥根県総務課
竹島資料室
'09.8.31
NO. 366





# 目次

●表紙題字 校長 名越和範

## 巻頭グラビア

創立百周年記念誌 刊行あいさつ	校長 名越和範
創立百周年を迎えて	鴨水同窓会長 伊藤文利
創立百周年を祝して	育友会長 寺坂和利
創立百周年記念事業ご協力へのお礼	記念事業実行委員長 安部和臣
第二世紀の東高教育	
校旗・校章 校歌 歴代校長 学校正門 学校全景	
学校風景うつりかわり	
創立百周年記念式典 (校長式辞 生徒代表あいさつ 知事祝辞 記念講演)	
記念事業 (記念モニュメント「発芽」 鴨水会館リニューアル)	
学校生活の今昔 (学校生活 部活動 生徒会活動 学校行事)	
目次	
凡例	

## 第1部 百周年沿革史

### 第一章 倉吉中学校時代

I 倉中創立に向けて	002
学制以前 学制の制定 近代教育制度の基本計画 倉吉中学設立への動き	
中学校新設気運高まる 県立農学校予科を設ける 研志塾の存在	
育英塾の創設 鳥取県議会の情勢 倉吉中学校設立認可	
II 倉吉中学校創立 (明治末年～大正期)	011
山口嘉藏の功績 仮校舎で開校 校舎落成	
学科課程・学級数・生徒数ほか 校章 (帽章) 通学方法の変遷 施設の整備	
第1回卒業式 校友会の発足	
III 倉中の充実発展期	026
校訓・校歌・校章 (勝島校長の頃) 学校行事など 都田校長とその教育方針	
社会状況と教育事情 校旗の制定 (大正11年) 奉安殿の設置	
軍事訓練の強化 校友会活動の活発化 応援歌 コラム「倉中時代の運動会」	
同盟休校 山陰公民学校と倉吉商業学校 創立25周年へ	
コラム「河本緑石と砂丘社の人々」	
コラム「前田寛治と福本和夫 パリに結ぶ友情」	

## 第二章 戦時教育体制

I 軍国教育の方向へ	085
軍国主義への道 愛国心教育と軍事演習 盛んな学校行事と校友会	
上級学校進学	
II 国民精神総動員運動	094
日中戦争と教育 入試改革と軍事教育	
III 戦時非常措置	102
戦時教育課程の実施 予科練と勤労動員	
IV 八幡ヶ丘	111

## 第三章 倉吉高等学校時代

I 民主教育への転換	117
敗戦と占領政策 学園の民主化、新時代を迎えた生徒たち	
II 新制高校の発足	122
倉吉第一高等学校の誕生 倉吉二高・倉吉実高の沿革	
III 倉吉高校の成立	132
高校の統合再編成と総合高校への道 倉吉高校の発足 新教育の充実	
生徒自治活動の発展 戦後改革の見直しと高校再編成	

## 第四章 倉吉東高等学校 一旧校舎時代一

I 高校再編成以後	153
倉吉東高校と倉吉西高校 文化講演会、生徒会活動の展開	
三学期制の復活	
II 創立50周年へ向けて	161
小林校長着任と学校改革 学習指導体制の確立 進学指導体制の強化	
III 創立50周年を機に	169
創立50周年記念式典挙行 鴨水奨学育英事業の発足 生徒会部活動	
手嶋校長就任・専攻科設置	
IV 普通科高校として再出発	175
工業科・商業科の分離 生徒急増期 学校行事の刷新	

## 第五章 倉吉東高等学校の新時代

I 竹田川河畔の新校舎へ	188
新校舎建設 新校舎へ移転 新しい伝統の創造をめざして	
創立60周年を迎える 紛争の時代 異常入試の波間で 陸上競技部全国制覇	
定時制課程のあゆみ 同和教育の推進	



長兼校長として学校経営の重責を果たされつつ女子教育に専念された。特に戦後の混乱期における女子教育には非常な熱意を傾注され、新しい中にも日本古来の伝統を継承する真の日本の女性の育成に努められたとお聞きする。

明治書院の懇請で謡曲大鑑全7巻、徒然草・源氏物語解釈全8巻など、国文学に関する数々の著作を世に発表されたのも周知の事実で、わが国の文学界に貢献された功績は大なるものがあった。

先生は東京鴨水会発足後数回出席され得意の謡曲を披露されたが、昭和34年頃から血圧が高く心不全を訴えられ、外出も控え、鎌倉にも週1、2回程度にして、夜間の外出は一切止められるなどして養生に努められた。鴨水会にも欠席され、親しくその營咳に接してご高説を承る機会がなくなった。昭和39年暮れに病勢悪化、入院加療に努められ、一時小康を得られたが、遂に41年3月4日ご逝去、葬儀は鎌倉女子学院葬として全校挙げての盛儀であった模様であるが、他に迷惑をかけることを避けて死亡通知は新聞広告のみ、近親者のみの密葬であったので、私も参列して弔意を表することができなかった。今なお心残りである。先生のごとき高邁な教育者は得がたく、世相混沌子女教育の愈々重視される今日先生を失ったことは国家の一大損失であり、われわれ生徒としてもこの上ない心淋しさを覚える次第である。心から先生のご冥福を祈り、ご遺族のご多幸をお祈りしてやみません。 (『60年誌』より)

#### 地方文化を支えた中井金三先生

倉中9回 前田 利三

中井先生は1914年東京から旧倉吉中学へ、図画教師として赴任して来られた。以来敗戦の翌年まで実に30余年在職された。同じ学校にこれほど長く勤続された方は全国でも珍しいと思われる。先生は小鴨谷きっての大地主中井家の次男として生まれ、明治の中頃一家を挙げて東京に移住された。したがって先生は中学は東京で了え、当時天皇の師傅として名高かった杉浦重剛の薫陶を受けられた。東京美術学校(現東京芸大)西洋画科に入学、黒田清輝の教えを受け、明治43年(1910)卒業された。

その頃東京美術学校西洋画科は新文化建設の意気盛んで、明治のフロンティア精神と欧州の新知识とを融合させて、美術のあらゆる分野で活躍した。同級生の藤田嗣治、田辺至、岡本一平、池部釣等の錚々たる連中が、卒業後も東京で、あるいは渡仏して仕事をしていった。その頃中井家は東京での商売に失敗して長男は南米に去り、先生は将来を有望視されながら都落ちをしなければならなくなり、一家の経済的負担はすべて先生にかかってきた。ここから先生の第二の人生が始まる。

当時の倉吉中学の図画教育は、文部省検定の手本を模写するといった程度で、先生は設備も不十分で、しかも芸術とはおよそ縁のない野暮な生徒に立ち向かわれた。教員の資格のなかった先生は助教



写真1-31 第9回卒業生  
三木校長時代(大正9年3月)

論心得という低い待遇に甘んじられた。その頃は用器画という美術と関係の薄い学科も教えずにはならず、時間数は多く全くの重労働であった。しかも当時の社会には「芸術は遊び」という考え方があり、至って理解が浅かった。そんな状態の中で先生の孤独を救ったものは、ごく少数の芸術に憧れる中学生であり、先生の家であり、油絵の魅力であった。

大正8年、先生の家に入出入りする倉吉中学生と卒業生数人で、先生を中心に芸術団体「砂丘社」を結成した。美術展を開き、回覧誌を発行し、舞踊団まで呼んで意欲的な活動をした。一時会員は全県下に広がった。

先生の絵は印象派といえる。印象派は色彩を重んじる。だが山陰の風景はあまり色彩的とはいえない。豊かな色を島根半島に、田内の紅葉するハゼの並木に、自宅のバラの花に求められた。ここに油絵の魅力にとり憑かれた先生の姿が伺われる。

先生の作品には、われわれ後輩がいかに努力しても追いつけぬ気品がある。師黒田清輝の流れを汲む格調の高いものがある。時代を超越した清冽な魂を感じる。われわれは芸術も商品と考えるが、先生には芸術は一段と高いところにあるべきだとの信念があった。

中井先生の竹島の話はあまりに有名で、教えを受けてこの話を聞かなかった人はいない筈である。先生の美校卒業前後、日本の洋画界には野心的で男性的なテーマをもった青木繁の「海の幸」、和田三造の「南風」といった大作が現われた。中井先生もそれらに刺激されて、当時親戚の漁場であった無人島の竹島を題材に選んだ。ここでの絵は後年竹島の帰属問題で外務省の資料となった。

先生は性格温和で実直で、野心的なところがなく、竹島では予期された絵の収穫は得られなかったようだ。しかしこのような性質こそ美術教育家として成功をおさめた所以と思われる。

先生は前田寛治の卒業後赴任して来られたので前田寛治は倉中では教わることがなかったが、彼は浪人中に先生の指導を受けた。彼をして美校受験を決意させたのは、先生の感化によるところが大きかったと思う。倉吉地方の美術人口は、鳥取や米子に較べて、その比率が断然高い。しかもそのほとんどは先生の弟子か孫弟子である。永年にわたって地方文化を育て支えて来られた先生の功績に、われわれはまだ十分に報いているとはいえない。 (『60年誌』より)



写真1-32 「バラ」中井金三





写真1-33 「竹島」中井金三

## 諸先生の思い出

倉中19回 大橋 二郎

先生といえば、都田校長から始めねばなるまい。よほど偉い教育者であつたらしいが、出来の悪い私にはよく解らなかつた。この校長先生を思い出そうとすると、真っ先に「牛」というあだ名を奉られていた先生の大きな顔がクローズアップされて迫ってくる。修身の時間に叱られた時の先生の顔である。大きな顔がみるみる紅潮して、これまた偉大な唇がブルブルと震え出し、やがて「馬鹿」とか何とか大砲のような一喝がとび出した。その頃チビで最前列に並んでいた私には、それが実によく見えたものであつた。

ゴマ塩の顎ひげの石亀先生、天神ひげの高本先生、両先生とも明治のイメージそのもので、英語の先生というよりも国学者か易者といった風貌であつたが、今思うと確かに古い古い明治の時代のできごとのような気がする。中井金三先生、日本海の無人島「竹島」の「アシカ」狩りの話は、この先生に教わつた者は皆聞かされている。ある時、教室に現れた先生は珍しく新調の洋服であつた。一瞬生徒の間にざわめきが起こつた。さて授業が終わると、中井先生はいとも無造作に色チョークのたくさんついた儘の大きな三角定規を腕に引っかけて教室を出ていかれた。あーあ折角の洋服が、と私は子供ながらに勿体ないような気持ちで見送つたのを覚えている。

これぞ芸術家といわんか大人物といわんか、いとも真面目な顔でチョッピリ猥談めいた話を織り交ぜて東洋史の講義をされた中原力蔵先生。NHKテレビの「旅路」の駅長の「この大喰い」と同じように「貧乏人」というのが口癖の、牧田大昔先生。あだ名を本名だと思つてミヤジン先生と呼んで叱られた生徒があるという、宮甚こと宮沢甚三郎先生。ギロチンこと飯田先生。ともに東北人らしい訛りに特徴のある大先生らしい先生であつた。

4年生の頃、徳屋という若い国語の先生があつた。ある時突然教科書を机の上に置くや、いきなり黒板に英語を書き、目を見張る不良少年どもに性教育を始められたのには驚いた。静かな先生であつたが、それだけに勇気ある行為であつたと今にしてしみじみ思うのである。(『60年誌』より)

## 剣道部OBとして

倉中19回 大谷栄之助

卒業して早や30有余年、いまさらながら流れる歳月の早さに驚いている。「第19回卒業」と自己紹介する折、とくに古参の部に入っていることに気がつく。戦前のよき時代に在学し、校歌・応援歌を歌って青春の血を沸かした5年間、小鴨川畔の歴史的校舎とともに当時の思い出をいささかたどってみることにする。

在学5ヶ年の間に、3年生の時から始まつた軍事教練に伴う査閲・連合演習・兵営生活、4年生の時名校長の都田先生の威徳を慕つて決行した、当時としても特筆すべきストライキ、またスポーツでは全国中等学校庭球大会で全国制覇をなしとげその歓迎の喜びで



写真1-34 剣道部

街が沸いたことなど、現在の生徒諸君には想像もできない数々のよき思い出が走馬灯のように次々と浮かんでくる。

白線3本の倉中生になることは当時の小学生の憧れの的であり、かなりの競争試験をパスして入学しただけに小さいながらも皆の者が誇りをもって勉強したように思う。現在のように大学入試準備で追まわられることもなく、それぞれ自由に中学生生活を味わい、卒業後直ちに実社会に出て働く者あり、あるいは高校・専門学校に進学する者ありで愉快的意義ある5ヶ年間を過ごすことができた。中でも私にとっては倉中剣道部とのつながりがいちばん懐かしいものとなつて残っており、その因縁で現在鳥取大学剣道部長として生氣瀦刺気力に満ちた若い学生諸君と接し、現に後輩の若良二君(鳥取大学教授)のごとき優秀な部員が、中四国大会・全国大会で大いに活躍しており、全く頼もしい限りである。

当時の剣道は正課であり、柔道と剣道いずれかを選択履修しなければならなかつた。狭い教室のうしろ壁に竹刀・防具が整然と吊り掛けてあつた。入学して間もなく校内大会があり、その折り5人が6人勝ち抜いて表彰されたのが機縁で剣道部に勧誘され、嫌な応援歌練習にも引っ張り出されずに済んだ。そして5年生の時にはマネージャーとなつて部員の世話をさせてもらった。晴雨にかかわらず放課後になると道場に馳せ参じて練習に励んだ。流汗淋漓の暑中稽古、寒気肌を刺す寒稽古、恩師中林清丸先生を中心に猛練習を重ね、対外試合にも優秀な成績を残した。この剣道との出会いはやがて六高・京大・教職とつながつて今日に至っている。周知のように日本古来の伝統をもつ剣道は「気・剣・体」の一致、あるいは「三先」を要諦とし、敢為・勇断・礼讓などの徳目を体得するものである。倉中時代にいささかでも培われたこの精神が今日までの拙い人生体験の上に大いに役立っていることを痛感し感謝している。人の和、先輩後輩のつながりなど部生活をとおして一層緊密なものとなつた。部員の中には既に他界されている人々も多数あり、幾星霜を経た今日、これまた中学時代の思い出の糸を手繰るよすがともなっている。倉中から倉東高へと変転し、「江山美なりが校舎 小鴨の清流前にして」と謳歌した倉中時代と凡そ隔世の感があるものの、幾多先輩の築き上げられた倉中魂は脈々と今日の倉東生に受け継がれなければならない。(『60年誌』より)

## 江山美なり我が校舎

倉中21回 榊井 迪夫

われわれが中学生だつたころ、春には校庭に桜が満開となり、周囲の畠には菜種の黄色い花が咲きみだれ、れんげ草が田圃や畑をうす紅の色に染めていた。正門の前には向山を背に河原のある小鴨川が流れ、空を仰げば西にはるか大山が望まれ、近く眼前に打吹山の美しい山容が静かに迫っていた。それはほかの山にはない気品を感じさせたものだ。われわれの母校、倉吉中学はそういう自然の恵ま



写真1-35 江山美なり我が校舎 (昭和15年)



## 編集後記

11月7日、創立百周年記念式典に列席して満堂の参会者とともにも母校の発展を祝いながら、私はかつて机を並べた学友をはじめ多くの卒業生、先輩、同僚を思い浮かべ、記念誌編纂の責任の重さを痛感した。

本校創立以来の100年は世界史でも激動の時代であった。平井知事もその祝辞で触れられたが、前日6日、祝賀記事を見開きの2面全体で報じた地元紙は、一面トップにバラク・オバマ氏の大統領当選を掲げていた。奇しくも本校創立の明治42年(1909)は、アメリカで後に公民権運動の中核となる黒人地位向上協会が発足した歴史的な年であった。また、この年、安重根によって伊藤博文が暗殺され、翌年に日本は韓国を併合したが、式典では友好交流を深めている韓国の安養高校からの祝電が披露された。このような動乱と変革、闘いと和解の一世の間、本校も世界と歴史を共にして歩んだことに私は深い感慨をもった。

しかし、ここで学び、友情の時を過ごした二万五千有余の卒業生は、いつの時代も変わらぬ若い情熱の日々をそれぞれの胸に刻んだであろう。この学舎の歩みと青春の足跡を限られた記念誌のうちに出来るだけ記録し、新しく踏み出す次の世紀への贈りものとしてというのが編集委員一同の願いであった。

編集委員会は本校のOBであり、本校勤務が比較的長い旧職員である5名をもって構成し、同窓会、学校の委嘱を受けて、平成17年12月に発足した。従来の記念誌は現職員が編集に当たったが、多忙を極める校務の傍らの業務遂行は甚だ困難であり、OBの編集委員一同は4名のレイアウト委員の助言を得ながら、まず、基本的な体裁、印刷の組版、造本などを決定し、執筆と編集の任を担うこととした。爾来3年、27回の編集委員会を重ね、紆余曲折を経ながらもここに最終稿を書き終えた。

本書は3部より構成される。各部の内容に関わる緒言はそれぞれの扉に記載したが、基本的に第1部沿革史で校史の流れを概観し、第2部青春の軌跡では生徒の自主的な活動を扱い、学園祭、各部の成果を出来るだけ記録するようにつとめた。第3部母校に寄せる想いは本校の教育活動を支えた鳴水同窓会、育友会の歴史を辿り、多数の卒業生に寄稿を頂き、座談会とともに、回想と展望としてまとめ、記念行事を記録して未来への饒とした。

各部の記述にはなるべく重複がないように努めたが、重要事項については内容的に重なる部分も存在する。

さらにDVDを活用し、校歌、応援歌などとともに可能な限り全卒業生のクラス写真を取録し、また現在の学校生活一年間のハイライトを記録して未来に遺す証言とした。

この記念誌刊行に当たって、何よりも多くの方々のご理解とご協力を頂いたことは感謝に堪えない。

まず、式典祝辞(要旨)の掲載をご了承頂いた平井知事をはじめ、多忙な時間を割いて玉稿を寄せられた卒業生、旧職員の方々、貴重な資料を提供されたの方々、原稿を閲読頂き、質問に回答頂いた関係者に心からお礼を申し上げたい。

また、伊藤鳴水同窓会長は編集活動に格段の理解を示され、名越校長はじめ現職の教職員は部活動の記録など多方面で協力された。特に、濱路政庸教諭は事務万端にわたり誠心尽力され、山本印刷のディレクター武田賢人氏は終始委員会の要望に耳を傾け、度重なる改稿に応じて委員と一体となり編集、印刷に努められた。ここに厚い謝意を記しておきたい。

これら各方面の協力によってようやく刊行に至った本誌であるが、残念ながら校史関係資料の保存、整理が不十分で叙述にやや偏りと欠落部分が生じ、なお執筆者の思わぬ不注意によって誤りがあることを懼れる。

予め各位のご寛恕をお願いする次第である。

この記念誌が、母校一世の歴史を伝えて同窓生を互いに結ぶ絆となり、伝統を今日の教育に生かす機縁として活用され、さらに本校が未来に飛翔する足場となれば、発行に関わったものとして、これ以上の喜びはない。

平成20年12月1日

編集委員長 高多彬臣

### 編集委員

高多 彬臣 山崎 英俊 矢田 隆壽 長谷川 弘  
岡本 康

### レイアウト委員

奥野 寛應 大田 英二 田栗 正之 桑本 充悦

### 編集委員会事務局

濱路 政庸 山根 信司 竹中 孝浩 蓼本 美砂

### 編集執筆分担

巻頭グラビア 山崎 岡本 高多

第1部 第一章 長谷川  
第二章 山崎  
第三章 高多  
第四章 長谷川 矢田  
第五章 山崎 矢田 岡本

第2部 第一章 山崎 高多  
第二章 濱路  
第三章 長谷川 矢田 濱路 竹中

第3部 第一章 山崎 岡本  
第二章 矢田  
第三章 高多  
第四章 高多 岡本

各部緒言 高多

付属資料 高多 岡本

造本監修 奥野 DVD 山根

## 創立百周年記念誌

発行日 平成21年2月20日

発行 鳥取県立倉吉東高等学校  
〒682-0812  
鳥取県倉吉市下田中町801番地  
TEL 0858-22-5205(代表)  
TEL 0858-22-2269(定時制)  
FAX 0858-22-5206  
URL <http://www.torikyo.ed.jp/kurae-h/>

編集 創立百周年記念誌 編集委員会

印刷 山本印刷株式会社  
鳥取県倉吉市広栄町971-21